

たそがれの味

泉鏡花作

全一章

世間にたそがれの味を、ほんたうに解して居る人は幾人あるでせうか。多くの人は、たそがれと夕ぐれとを、ごつちやにして居るやうに思ひます。夕ぐれと云ふと、どちらかと云へば、夜の色、暗の色と云ふ感じが主になつて居る。しかし、たそがれは、夜の色ではない、暗の色でもない。と云つて、晝の光、光明の感じばかりでもない。晝から夜に入る刹那の世界、光から暗へ入る刹那の境、そこにたそがれの世界があるのでありますまいか。たそがれは暗でもない、光でもない、又光と暗との混合でもない。光から暗に入り、晝から夜に入る、あの刹那の間に、一種特別に實在する一種特別な、微妙なる色彩の世界が、たそがれだと思ひます。此のたそがれと云ふ一種特別な世界が、光から暗に入る間に存すると等しく、暗から光に入る境、夜から晝に移る刹那の間隔に、東雲と云ふ微妙な色彩の世界がありま

す。これも暗でもなく、光でもなく、暗と光との混合でもない、一種特別な世界です。世界の人は、夜と晝、光と暗との外に世界のないやうに思つて居るのは、大きな間違ひだと思ひます。夕暮とか、朝とか云ふ兩極に近い感じの外に、たしかに、一種特別な中間の世界があるとは、私の信仰です。私はこのたそがれ趣味、東雲趣味を、世の中の人に傳へたいものだと思つて居ります。

このたそがれ趣味、東雲趣味は、單に夜と晝との關係の上にはばかり存立するものではない。宇宙間あらゆる物事の上に、これと同じ一種微妙な世界があるとと思ひます。例へば人の行くにしましても、善と悪とは、晝と夜のやうなものです。その善と悪との間には、又滅すべからず、消すべからざる、一種微妙な所があります。善から悪に移る刹那、悪から善に入る刹那、人間はその間に一種微妙な形象、心状を現じます。私は、重にさう云ふたそがれのな世界を主に描きたい、寫したいとも思つて居ります。善悪正邪不快不快のいづれの極端でもない、一種中間の世界、一種中間の味ひを、私は作の上へ傳へたい

とも思おもつて居をります。